地域とともに育んできた「たからもの」

～津久見樫の実少年少女合唱団 創立40周年を迎えて～

1979年に結成し、津久見の人や街に歌声でいつも元気を届けてくれる「津久見樫の実少年少女合唱団」は、今年で創立40周年を迎えました。

数々のコンサートを通して、勇気や感動を届ける一方で、団員の減少などの苦難を乗り越えてきた「樫の実」を代表して、結成の翌年から樫の実を指導し、一番近くで子どもたちを支えてきた指導者の浜野征子先生と、団員をまとめ、樫の実を引っ張っていく役割を担う団長の薬師寺千帆さんのお二人にお話を伺いました。

子どもたちの強い意志と努力、合唱団を愛する心に感謝

浜野先生　この40年間、歌う子どもがいない限り、樫の実として、絶対に続かなかったと思います。小っちゃい子を育て、その子たちが大きくなったときに、自分たちがしてもらったことを下の子どもたちに歌い継いでいくという強い意志と努力、そして合唱団を大切に想い愛する心に感謝しています。

まず、創立40周年を迎えて、率直な気持ちを伺ったところ、語ってくれたのは、子どもたちへの感謝の言葉でした。それと先生にはもう1つ〝こだわり〟があると言います。

浜野先生　うちは制服を団で持っていて、個人持ちには、していません。それは子どもの成長が早くすぐに買い替えないといけないということだけでなく、多くの先輩たちが流した汗や涙が樫の実の制服には染みこんでいます。その制服に自分たちが袖を通すことで、伝統の重みと誇りを持ってくれるようにと。いまでも大切にしており、最初からそのままです。

10周年を迎え、旧西ドイツ公演に出演した際、ビン集めから始まって作られた制服は、ずっと同じ形で、空と海の色を表現した「ブルー」のカラーも変わっていません。みんなの善意でできた制服は、樫の実の象徴にもなっています。40年が経ったいま、あらためて子どもたちと、そういう誇りを持った合唱団に成長してくれたことに感謝していると浜野先生は語ります。

ほんの小さなきっかけから

指導者として迎えられた当時、浜野先生は、こんなにも長く樫の実に携わるとは思っていませんでした。それでも続けてこれたのは、子どもが好きだった、合唱が好きだったからです。それは子どもたちにも同じことが言えるそうです。

薬師寺さん　つくみん公園で扇子踊り大会を家族で見に行き、そこで歌っていた樫の実を見て、「自分も歌ってみたい」と興味を示し、練習に連れていってもらい歌ってみたら、お姉ちゃんたちが真剣に教えてくれたのが嬉しくて、入りました。

新しい子でも練習の輪の中に入り、お姉ちゃんたちに優しく教えてもらいます

「歌ってみたい」という想いから、入った場所には、優しいお姉ちゃんたちがいたからこそ、樫の実が好きになる子も多く、「大好きなお姉ちゃんみたいになりたい」。子どもたちは、その憧れを感じて、少しずつ成長していきます。

薬師寺さん　練習のときには小っちゃい子や小学生に対して、上の中高生がほめたり、注意をしたりして、コミュニケーションを取ります。本番のときにも言われたことを覚えていて、注意しながらやっています。逆に高校生とかは、OGの方が忙しい中でも来てくれて、自分たちの気づかないことをアドバイスしてくれます。わからないことも気軽に相談に乗ってくれたりして、先生と私たちの間の大切な存在です。

毎年訪問する障がい者の方が入所する施設では、歌を通して心の声を届けます

言葉だけでなく、心と心の交流

樫の実では、合唱のほかに「奉仕活動」を毎年続けています。お二人とも一番印象に残っていることについて、その活動を語ってくれました。

薬師寺さん　普段から奉仕活動をして、老人ホームなどの施設に行って、歌を通して交流しています。そういうときにも病気の方や言葉が出にくい方は、最後に「ありがとう」っていう一言を言ってくれたり、しゃべれない方でも涙を流してくれます。その一言や涙で、今日一緒に歌えてよかったなぁって思うし、その「ありがとう」の言葉の重みをいつも感じています。

浜野先生　一緒ですね、やっぱり。樫の実として奉仕活動は絶対断ったらいけないのが基本です。だから、そういう施設に入所されている方から言われる「ありがとう」の言葉で本当に心と心が通じたんだなぁと思います。普通でいう言葉の交流じゃなくて、心と心の交流みたいなものが一番印象に強いですね。それとやっぱり子どもの声っていうのは、そのまま心の中に入っていくという不思議な魅力があります。子どもだったら、その元気さや明るさや声が入所されている方の心にストレートに入っていくことをとても感じます。それが一番大切で、子どもにしかできない、合唱団としての大事な活動と思っています。もちろんこれからも「奉仕活動」は樫の実になくてはならないことで、「演奏会」と「奉仕活動」の〝2つの柱〟を大切にしていきます。

つらい苦しいときこそ私たちは歌で救われた

一昨年、市内各地に未曽有の被害をもたらした台風第18号災害。そのときに樫の実が感じたことも伺いました。

浜野先生　あのとき本当に練習していいものか悩みました。被災した子どももいる中で、休んだ方がいいと思ったとき、保護者のお母さんに「こういう時ですが、練習は休んで欲しくありません。ぜひ続けてください」と言われ、こういう時こそ、音楽って必要だなと思ったんです。周りの方からも温かく「これからも頑張ってね」と、子どもたちがたくさん声をかけてもらったことでみんな元気をもらいました。音楽の持つすごさをあらためて知らされました。

昨年の国民文化祭の経験も樫の実にとって夢のような時間だったと言います。

薬師寺さん　私たちの歌だけじゃなくて、ダンスや太鼓、いろんな分野で活動する人たちと一緒に1つのステージができて、楽しかったし、参加できて嬉しかったです。

浜野先生　ジャンルの違う人達と1つのものを作り上げていくことにすごい達成感があって、楽しかったです。皇太子同妃両殿下が訪問されたときも、子どもたちがいいところを見せよう、うまく歌おうというところが一切なく、いい緊張感の中で自然体の合唱をしてくれて、子どもたちが秘める力を感じました。

心に響く歌を歌う・子どもの力を信じています

最後に、今後の目標や夢、市民のみなさんに向けて、伝えたいことを伺いました。

薬師寺さん　団として、これからもたくさんの人の心に響く歌を歌うことがいまの目標で、団員みんながんばっているので、それができればいいなぁと思います。自分自身は、樫の実での奉仕活動の経験を通して、医療とかの仕事に進みたいなぁと思っているので、樫の実で長年やってきたことを生かした仕事ができたらと思います。

浜野先生　人のために、一番弱い人のところに手を差し伸べれるような職業を選んでくれることは、とても嬉しく、なによりも合唱団をやってきて、よかったと思います。それを踏まえて、なんとか「創立50周年を100名で迎えること」が夢です。また、樫の実が40年間育んでこれたことは、演奏会や奉仕活動のときに温かい拍手や励ましの言葉をくださった市民のみなさんのおかげだと思います。本当に感謝しています。これからも地域に愛され、地域に根差した合唱団として、在り続けたいと思うので、温かい拍手で子どもたちを応援してください。

地域とともに「育んできた」「たからもの」が、これからもたくさんの人たちの〝光〟となってくれることを願っています。

（聞き手 岩崎友希）

皇太子同妃両殿下訪問の際に撮影した1枚。これからも人の心に響く歌を歌い続けます